

「挨拶」「研大文化フォーラムの評価と展望」総合研究大学院大学文化科学研究科総研大文化フォーラム2020学生企画委員会編
『総研大文化フォーラム2020報告集 文化のレジリエンスとは？：異をつなぎ、未来へ』
於 国際日本文化研究センター 実施 2020年12月5-6日 国立大学法人 総合研究大学院大学 文化科学研究科 2021年3月31日 64-67、99-104頁
めの一種のルアー、疑似餌であったかもしれません。だけど、それによって結局、一つの問題
が持ち上がってきたということ、これが大切だったと思います。

私、手が三本もありませんので、討議資料を参照しながら、ここでマイクを手にして立って
おしゃべりするのがちょっと難しいのですけれども、一つ言えることは、外国語の語彙をその
まま使うのが、時として極めて危険だということがある。翻訳したときに、そうとは気づかず
話がずれてしまうのです。カタカナ語の流用は、日本の行政ではほとんど自動化して行われて
いますけれども、大体そこでは何か（意図的に）隠（さ）れています。

例えば、コンプライアンス complianceという言葉がありますけれども、あれは服従という
意味ですね。服従しなさい、屈服することが正しいのですよ、と政府が言っているわけです。
それから、エンパワーメント empowermentという言葉があり、行政用語としては少数派への
権限付与を意味しますが、これは今日、詳しくは展開しませんが、それなら力がない人
は、権利を認められない、ということになる。無力は悪、という価値観ですが、それはおかし
いと私は思います。力をつけていくということは必要ですけれども、力がない方は、じゃあ見
捨てていい、ということにはならないはず。

レジリエンスにも同じようなことがございます。これはボールがもともとぼんぼんとはじけ
るといふ、そういう意味のラテン語から来ていますけれども、今、辞書を見ますと面白いこと
に「意地をはって敗北を認めない」というのがレジリエンスなのですね。これ、どこかの超大
国の、そろそろ「元」になるはずの大統領が言っていることですね。

それで、今日の午前中の三つの発表、素晴らしい発表だったと思います。宋琦さんの提起さ
れたことは、これは日本だけではなくて中国、インド、そして非キリスト教圏が近代において
国家と宗教をどのよう扱っていったか、どう扱えばよいのか。これはとても個人研究では手に
負えない。総研大の文化科学の中で共有すべき大きな問題だと思います。

それから、金丸さんのおっしゃったこれは、本当に文理融合なんて綺麗事で推奨されますけ
れど、現場に行くと、それが実践できなければ、通用しない、そうした現実があると。それか
ら、「上のほうから」という言葉が出ましたけれども、行政から入ってくると、これは尺度が
合わないのです。それで現場で何が起こってしまうかということについても、これは大変貴
重な話。そして、環太平洋という圏域の置かれた環境を見ていかななくてはいけない。これは文
理なんて超えた話です。そこへの出発点になる話だったと思います。

それから、三人目の前山さんと後藤先生、これも大変大切な話で、つまり文理融合なんて簡
単に言えますけれども、そこで一体情報をどのように扱っていくのか。この情報、インフォ
メーションという言葉も、実は日本語では実に雑駁に使われています。データとインフォメ
ーションとどう違うのでしょうか。そういうこと一つ分からないような情報教育がなされていま
す。そうした欠落を考えていく必要がある。さらに本当なら、おふたりの議論を今から広げて
いくべきところですが、残念ながら、この場では時間もございません。

長くしゃべり過ぎました。簡略な指摘にとどめますけれども、今日、ヘリテージ heritage と
いう言葉が出てきました。ユネスコでも intangible heritage が指定され、そのまま放置すれば
絶えていって、なくなってしまうような文化を、行政の力によって何とか生き残らせよう、生
き返らせようとしています。しかし、そうした財政援助の介入のおかげで現場が修復不能な変
質をこうむってしまうという事態も発生している。これはユネスコで無形文化財保護運動に従
事している現場の方たちが一番よく知っていらっしゃいます。

王 ありがとうございます。

最後に、文化科学研究科国際日本研究専攻の稲賀繁美専攻長よりご挨拶を頂きたいと
思います。稲賀先生、よろしく願いいたします。

挨拶

稲賀 繁美

今、石原さんのほうからきちんとしたご挨拶があったので、その後で私がしゃべるといふの
もちょっと格好がつかえません。何分あったかな。止めてくださいね。

レジリエンスという言葉を使うということで、始めました。結局これはすごく悪い使われ方
をしてしまっている言葉だ、ということがはっきりしました。これだけでも大切なことだと思
います。言ってみればレジリエンス resilience という言葉は、今回の皆さんの話題を集めるた

そのヘリテージという言葉、これは日本語でいうと「遺産、相続」というものですね。次の世代に継いでいくという営みであり、さきほども話題になりました。ところで、日本語だと、これは「継ぐ」という言葉は「償う」という言葉と極めて近く、密接につながっています。ところが英語圏ではheritageという言葉と、例えば「償う」compensateとは、語源として全然つながらないのです。両者は欧米語の認識ではほぼ無関係です。

「償う」ということはどういうことかという、その出発点に、実は喪失や欠落があります。何か失われてしまったものがある。その取り戻せないものをどうするか。後に残された我々として、この喪失や損失にどう対処していくか。そのことが実は「次の世代に継ぐ」という営みに含まれている。我々の日本語の世界では少なくとも「継ぐ」と「償う」についてそのような連続した考え方がある。

今日、2日目のシンポジウムで面白かったのは、「欠損する身体」の事例です。「ひとつ目」とか「片腕」、「片足」、これはなぜでしょう。私が思いますのに、つまりそれは失われてしまったものがあるという事実を出発点にして、それを次の世代に継いでいくという意識ではないか。これは柳田國男が早くから指摘していて、ドイツ語ではEinseitigkeitつまり「片側性」などとも呼ばれますが、ここには、「欠損」をそれとして残す意思がある。そうした「異形」を石に刻んだ人たちには、子孫に残す「遺産」のはたすべき役割について、大きな知恵が働いていたのではないか、という様に思われます。というのも、その「欠けた」部分、空隙に「霊」が宿り、今にまで残るわけですね。そのことは大変大切だと思います。

そして、そうした喪失の体験から歌が生まれ、詩が生まれます。我々は身近な人を亡くしたときに突然、歌が出てきます。それから詩が。なぜかそのときだけは自分が詩人になったように、不思議と出てまいります。鹿踊りも、その起源では同様の先祖儀礼です。おそらくは、もはやとりかえせない「喪失」を埋めるために、歌や詩が湧いてくる。だがその湧いてくる源は、自分たちのご先祖であり、そのご先祖は喪失としてしか残っていない。—resilienceの意味をもう一度問い返すうえでも、とても貴重な機会だったと思います。

この調子でやっていくと收拾がつかなくなりますので、このあたりでやめますけれども、今日、玄侑宗久さんの話が出てきました。彼の芥川賞受賞作「中陰の花」について、日文研の二代所長だった河合隼雄は「仏になるというのはほどけることだ」というのです。つまり、個というものがあつただけけれども、それがこの世からあの世に行くことで、「ほどける」というわけです。そのように解けること、この世にあった人たちは「仏」になっていく。それを我々はどう見送っていくのか。そこに実は我々の生きざまがあります。

アーカイブズを作るときに、ストックとフローという話がありましたけれども、私がそこに噛み付いたのは、実はそのためでした。ストックを作るためにはフローが必要なわけです。その両方の関わりということが、実は文化の生態、さらには生命現象でありまして、それを基礎に情報学を考え直していく、これも大変いい機会になったと思います。

最後に、全員のお名前をお呼びできませんけれども、今回COVID-19の大変な状況の中で、前例がない文化フォーラムを企画立案し、実現に漕ぎつけてくださった、石原さん、前山さん、岩下さん、金丸さん、服部さん、宋さん、王さん、伊藤さん、本当にありがとうございました。事務の方にも本当に普段にはないような努力をしていただきまして、これも私、はたで見えて本当に感動いたしました。「つなぐ」という言葉が出ましたけれども、この経験を来年度以降の下級生の人たちに、それこそ繋いでいく、開いていく、そうした「継承」ができればなによりと思いますし、その大変いい「遺産」を残すきっかけになったのではないかと、思います。

昨日は学長を初めオンラインでもご参加をいただきました。それから、このオンライン開催、今回は初めての実験ですけれども、総研大の中だけではなくて、外の聴講者にも開くということを試みました。これも続けていっていただければ、と思います。

配った資料が、今映像では提供出来なくてお申し訳ないのですが、実は来週、関係の行事が更に展開します。今回は、「国際日本研究コンソーシアム」とも共催のかたちで、一緒に「文化フォーラム」をやらせていただきました。この「コンソーシアム」には国際日本研究専攻も入っていますけれども、国際的に日本研究をすすめてゆく、日本国内の10か所を超える研究所や大学院組織と共同で運営しております。さらにその範囲を海外にも広げていこうという、そういう営み、ペキンやソウル、欧州や南・北米とも繋いでいます。

一つだけ、これは皆様のほうに情報の共有ができていますと思いますけれども、例えば二週間先に大阪大学のグローバル日本学研究拠点というところで、これも国際シンポジウムがございます。たくさんあり過ぎて大変なのですけれども、世界的に日本のことを研究して活躍している中堅から若い方たちが集います。本当はこうした行事とこの文化フォーラムとをくっつけて、共同開催ができれば、とも考えたのですが、とても2日、3日では一緒にできません。ただ、次の世代の学生さんたち、院生の方たちには、こういう海外との繋がりにあっても、積極的に率先してリードleadを取っていただくということは大変貴重なことだと思います。留学生の方たちの出身地との関係も深めていける。そうした可能性も開かれていると思いますので、またご尽力いただければと思います。

先ほど石原さんがきちんとしたご挨拶をなさったのに、全然そのあとをまとめることができなくなりました。このような閉会の辞をしてはならない、という悪い見本です。私、今年でこの専攻長もやめますし、総研大、日文研からも引かせていただきますけれども、最後にこういう大変素晴らしい機会を頂いたことを改めて皆様に感謝したいと思います。

大変長くなりまして申し訳ありません。以上でございます。(拍手)

締めと事務連絡

王 ありがとうございます。

以上をもちまして総研大文化フォーラム2020、全てのプログラムを終了いたします。ご参加いただいた皆様、先生方、また準備などにご協力いただきました学生、職員、事務の皆様、ありがとうございました。

重ねてのお願いになりますが、今回ご参加いただきましたフォーラムを振り返り、今後の企画、運営の改善のためにアンケートへのご協力をお願いいたします。オンライン参加の皆様はウェブ帳に掲載しているURLよりアクセスをお願いいたします。会場の皆様はQRコードよりアクセスをお願いいたします。ありがとうございました。(拍手)

4 関係者による開催総括およびアンケート結果

4-1 総研大文化フォーラムの評価と展望

フォーラム事業担当 国際日本研究専攻 専攻長 稲賀 繁美

◆1日目の総括

1. 「見えないものへの恐れ」について

開会式の挨拶で、国際日本文化研究センター所長の井上章一氏は、リオデジャネイロの病院で診察のおり、ベッドに上がるのに思わず靴を脱いで、医師に叱責された経験を語った。身体に内面化された慣習が異文化の環境下で逸脱行動とみなされる「文化摩擦」にresilienceの現場を見る観察である。2001年のニューヨークのテロに続く時期、北米合衆国の空港では、安全検査のために、靴を脱がされたが、筆者は、空港の検査室に設けられた絨毯を素足で踏んだその瞬間に、なんともいえない開放感、懐かしさが、足元から身体に湧き上がってきたのを、今に至るまで、痛烈に記憶している。だが、この束縛からの素足の解放は、屋内でも靴を履く文化圏の人々には、人前で裸体を晒すような違和感がある。

つづく基調講演で、小松和彦名誉教授は、危機に際会した場合の復元力が発揮されるためには、余白すなわち動きのためのマージンの確保が不可欠であることを確認した。日本語の古語では、例えば車輪の軸と軸受とのあいだの「あそび」であり、それなくしては、およそ生命の営みはありえない。現在、世界は、COVID-19と呼ばれるウィルスによる「自然界からの脅威」に対して、いかに文化的にこれを克服するか、という問いとその対応に追われている。今回の文化フォーラムも、この状況下で「文化のレジリエンス」を主題とした。だが小松先生は、生態学用語たるresilienceを文化に適用することに疑義を呈した。

その基調講演の題名には「見えないものに対する恐れ」とあった。自然科学系の学術では分析結果の数値化により、自然現象を「可視化」することに意義を見出す。だが実際には可視化された世界の裏側には、見えず、聞こえず、データとしては把握できない「隠された次元」が広がっている。可聴域、あるいは可視光線（さらにはお望みなら紫外線や赤外線さらにはX線……）で捉えられる識閥だけで「現実」を再構成するのでは、重大な見落としが発生する。そうした認識上の盲点は、実際には至るところに隠されている。さらに「不可視」を「可視」に変換し回収するだけで十分なのか。むしろ「見えないもの」への「恐れ」に、人間の本質もあるのではないか。ヒトは「恐れ」をいかに手助け、あるいはいかに畏怖してきたのか。こうした方法論的な反省が、基調講演には込められていた。

2. 口頭発表

ひとつの生態系は或る識閥を超えると復元可能性を失い、崩壊を遂げ、次の系へと変貌を遂げる。Resilienceとは語源としては復元弾性の謂だが、右にふれた「あそび」も、そうした弾性確保のための「余地」marginでもある。ロマン派の詩人John Keatsには「否定的能力」negative capabilityという言葉が知られる。現在の「コロナ禍」でも、医療現場や精神科の一部で、「回答のない問題への対処能力」といった意味合いで、この言葉が援用（あるいはいささか誤用？）されている。

こうした概念を参照しつつ、初日午後の3つの口頭発表に短評を加えておきたい。

まず吉川弘晃さんは「昭和初期の日本でのソヴィエト文化への視線」と題し、第一次五カ年計画期（1928～32）の日ソ文化交流を概観した。一般論として、外からの刺激をいかに受容するかに対応には、受け身の柔軟性ととも、相手に食われてはしまわない反発力も要求される。Resilienceという語彙にも、語源的にこうした伸び縮みが含意されている。だがこれは異文化交流における自己変容を分析するのに、どこまで有効なのだろうか。

次に黄叢叢さんは、中国人日本語学習者の連語習得の現場をアンケート調査に基づき、分析した。「試験を受ける」とか「大学を受ける」といった表現の場合、中国語では「受」という動詞は用いない。だが「評価を受ける」に相当する中国語表現では「受」を用いる。後者より前者が習得困難なことは、容易に想定できよう。Resilienceも、「受ける」行動に伴う反応だろうが、この観点からの日中比較も興味ある課題だろう。と同時に、日本語あるいは中国語として馴染まない表現でも、そのほうがより実感が湧く、という場合も少なくない。現時点での用法に照らして、正解か誤答かという頭ごなしの基準で分析をすすめる代わりに、それこそ言語変貌における可塑性可能性や詩的放縦 poetic license といった観点から文化の相互接触における resilience を測定するという可能性も開けるはずである。

三番手の児島啓祐さんは、『平家物語』に現れる「堅牢地神」に関する実証的な用例探索と考証を旨とする詳細な研究成果を披露した。「地震災害」との関連での「文化のレジリエンス」にふさわしい話題選択、との判断でもあったのだろうか。「災異叙述」の蒐集検討としての意義は、たしかに明確だが、その検討結果の提示が、今回の文化フォーラムの「主題」にいかなる貢献をなすのか、いまひとつ踏み込んだ研究意図を表明することも、大切な誘いの一歩となるだろう。

総じて一日目の3発表は、今回の「文化フォーラム」のテーマにどのように関与するのか、その問題意識がなお希薄であることは、認めざるを得まい。

いささか老婆心からの忠告、あるいは主催責任者の側にたった反省事項となるが、一般に、学会への発表申請の場合などには、その会合のテーマとの整合性や、当該の発表がいかにそのテーマの掘り下げや、相互関連の強化に貢献できるのかも十分に計算しないと、採択却下となる恐れも大きい。学会の統一テーマそのものも、とりわけ大規模な年次総会などでは、ご祝儀で便宜的な「流行り言葉」に過ぎない場合もなくはない。逆に小規模な研究会であればあるほど、お門違いな提案は、いかに学術的に優れていても、評価されない憂き目に遭う。学会的環境の resilience を「読む」技能や気配りもバカにはならない。

「幸せ」とは「仕合わせ」に由来するとの発言が、木場貴俊さんからあったが、そうした社会的配慮も、会合を求心力ある盛会へと導く要因として、ゆめゆめ疎かにはできまい。

3. ポスター発表

第1日後半から2日目午前にかけて、ポスター発表があった。担当専攻の専攻長として、ほぼ全員のご発表について討論を交わす機会を得たが、同時並行で六件の発表となったため、この場で逐一の話題に対して筆者としての個人的意見を述べることは、差し控えたい。

一般論として、主催会場の事業担当者としての反省をいくつか述べておきたい。まずオンラインでの個別の討論と、展示ポスターとの併用には、各地に分散した会場の都合もあって、なお技術的に改善すべき点が残った。また事前に事務局よりビデオによる自己紹介を依頼したが、準備時間が不足して、直前のお願いとなったため、2日目のシンポジウムの依頼ともど

も、出席者に少なからぬご迷惑を及ぼしたことも、反省点となる。

今回の「文化フォーラム」は、総合研究大学院大学の全学事業として、冒頭には長谷川眞理子学長からもご挨拶を頂いた。自然系をもふくむ複数の専攻から、聴講希望があったとの報告を得ている。また国際日本研究専攻が所属している「国際日本研究コンソーシアム」との共催の許可を取り付け、コンソーシアム参加機関の院生による参加や発表を得たのは、今後の運営でのひとつの可能性の開拓だったといえよう。将来には、より拡大した参加者をオン・ラインで繋ぐような催し物へと脱皮することも、可能かもしれない。これをきっかけに、担当となった専攻の基盤機関だけではなく、文化科学研究科を構成する複数の施設案内を、オン・ラインを活用して、より充実させ、総合研究大学院大学や人間文化研究機構には直接属さない研究機関への発信や相互交流の機会とすることも有効だろう。

とりわけ本年度は、COVID-19の影響で、4月に入学したものの、葉山の大学本部をはじめ、研究施設への来館もままならず、自宅待機を余儀なくされ、実験や調査にも支障をきたしているばかりか、同級生や上級生とまだ生身で接する機会もない、という窮状を訴える新入生もある。こうした逆境をnegative capability発揮の機会へと転じて、例えば卒業生とも連携をめざすオン・ライン開催へと発展する可能性、さらには、関連する「国際日本研究コンソーシアム」の国際的な規模の研究会と連絡をつけることも、ZoomやWebinarといった新登場の機器活用とも相まって、積極的に開発してゆくべき方途とも言えるだろう。こうした新たな試みに前向きにご協力を惜しまれなかった、葉山本部および、各専攻さらにはその基盤機関の事務担当者の皆様にも、この場を借りて、ひとこと深謝申し上げる。

◆2日目の総括および、閉会の辞

1. Resilienceへの反省

1日目の小松和彦名誉教授による基調講演、および2日目午後のシンポジウム「災いから考える文化のレジリエンス」によって、今回のテーマに挙げられた「文化のresilience」、とりわけ和語に訳された「レジリエンス」の不適切さが浮き彫りにされた。だがこれは、選ばれた題目が「疑似餌」として有効に働いた証左であり、流行語を無批判に流通させる風潮の危険性を確認するうえでも、貴重な機会となった。思えばgovernabilityとは「統治能力」と誤訳されたが、本来は「被統治能力」すなわち、「お上」の命令を上意下達ですなおに受け入れる、「国民」側の「能力」。compliance研修などと言われるが、これもcom皆がpliすなわち平伏するという恭順・服従がいつのまにか「国民の良識」にすり替えられた用法。Empowermentが推奨されるが、これはそうした「力量」を望めない弱者の切り捨てを正当化する「自己責任」の議論と表裏一体である。Resilienceに「国土強靱化」の訳を与えたところにも、現在この国の「国土」意識、「強靱さ」への幼稚な憧れが反映されている。

さらにresilienceの現在の用法を見ると「敗北を認めない意固地な姿勢」という英語解説もみえる。どこかの超大国の「前」大統領は、見事にresilienceを発揮しておられる訳だ。そしてこの「飛び跳ね能力」という弾性復元を語源とする術語は、生態系が損傷を被った際の回復限界を測定する術語から、社会科学用語・行政用語へと変身を遂げるなかで、国家が獲得せねばならぬ国是の到達目標、国民が果たすべき義務へと、すり替えられた。だが沿岸部を中心に発達した都市文明は、「自然災害」に対して、きわめて脆く、復元性を著しく喪失している。そうした「敗北」を認めない「片意地」が「国策」となっている。国際日本文化研究センター

創設者、故・梅原猛が「文明災」と命名した「事象」である。

2. 2日目口頭発表

以上を前提として、2日目午前の口頭発表に手短に言及したい。

宋琦さんの川合清丸研究は、まだ端緒といいながら、近代における西欧圏とその外部との思想的な出会いにおいて発生した宗教・思想上の重要な課題に肉薄する。近世の神儒仏の「三教」思想は、明治政府のキリスト教容認や神祇制度の度重なる改変とも連動して、儒教を表向きは宗教から除外する反面、神道に超宗教的な役割を担わせ、キリスト教倫理に対抗させようとする思想動向と連動する。一八九三年にはシカゴ万国博覧会を機に「世界宗教議会」が持たれ、日本からも仏教関係者が参加する。新渡戸稲造の『武士道』は世紀末転換期の宗教思想をめぐる世界的な潮流に棹さしており、姉崎正治の比較宗教学設立も含め、インド亜大陸での同時代の思想傾向、東洋的精神性 spirituality の議論（例えば富澤かな氏の研究）やイスラーム社会の近代化論とも比較が有効となる。これはとても研究者ひとりで探求可能な課題ではない。将来、国際日本研究の共同研究課題として、世界思想史的な視野から探求されるべき、壮大な課題が、ここに集約されている。総括者の専門に引きつけるなら、横山大観に《迷児》が知られる。暗黒のなか、老子、孔子にキリストが幼児に進むべき道を論しているが、その方向は定かでない。敬神家・大観はとりわけ後年は皇国史観に傾く人物だが、人格化された神格をもたない神道は、この絵画作品には、もとより登場しない。大観が菱田春草とともにインドに招かれるのは、1902年、日英同盟締結直後のこととなる。

金丸雄一さんの三重県志摩半島地域を中心とする「アマ」（海女のみならず男性を含む海人）をめぐる発表は、「黒潮大蛇行」による環境の変化に晒される環太平洋の海産資源と、漁労を生業とする人々の営みとの接点を、両者の相互作用のなかに克明にあとづける。英虞湾から北の海底の磯根の生態系は均衡を失っているが、これにCOVID-19による商品需要の落ち込みが重なり、漁労に立脚した生活は、外部からの給付金なしには立ち行かない危機に直面している。海藻の水揚げが激減する一方、サザエの漁獲は急増しており、生態系のresilienceが崩壊する危険性も指摘されている。行政の関与も含め、「アマ漁」や素潜り漁の置かれた複雑な現状を一般化するの是不適切だが、ここには気候変動や海洋学、生物資源学・社会学・行政学などの複合が要請され、また志摩半島を集約点として環太平洋全域におよぶ問題意識の共有が課題となる。現場は文理融合した分析あってはじめて有効なモデル構築の出発点となる。そしてここには水半球の資源問題という21世紀の課題が集約されている。人間文化研究機構に留まらず、総合的な調査プロジェクトが必須となるはずだ。

第3に後藤真准教授と前山和喜さんによる「近代科学資料アーカイブ構築のための課題分析」。これも総括者による問題意識に沿った整理に留めるが、デジタル・アーカイブの問題点を縦横に指摘した貴重な報告だった。まず観測機材のデジタル化や機器の更新にともない、初期デジタル・データの保存や二次使用に必要な環境が急速に喪失している。また時代遅れになった技術はデジタル記録に保存しても、もはやそれを使い熟せる使用者が存在しない。端的に言って読めない記録が膨大に増加している。さらにここには、コトとモノとの分離が顕著となる。デジタル情報は、それを載せる媒体からは遊離する傾向を呈するが、これは従来のモノ保存に重点を置いた博物館行政の保存方針では、回収不可能となる。いわば情報記録のresilienceは、digitalizationの進行とともに、急速に劣化している。

総括者は近年『博物館の憂鬱』といった研究書刊行に関与し、「タイム・カプセル」理念そのものが決定的に時代遅れとなっている事例に注目し、資料保存のparadigmそのものが抜本的な変質を遂げている状況を考察した。また「デジタル人文学」の近年の趨勢についても、理系の技術を文系に応用するといった「文理融合」理念では、かえって現場の喫緊の要請に対応できない背理を指摘してきた。とりわけ電子機器に関しては、現在の範例から遡行して過去の遺産を解析することには、方法論的に限界があり、それを超克することは、かえって技術上の断絶という事実を覆い隠し、偽りの連続性を捏造した歴史理解・歴史記述へと逸脱しかねない。これは1980年代にW. Benjaminの著作の再評価とともに、歴史記述における解釈学的循環／裁断として、しきりに議論された哲学的難題だが、昨今の資料資源学では、そうした知見は、あたかも存在しなかったかのごとく、忘却されている。

端的に言えばクロード・シャノンの情報理論に基礎をおいた範例paradigmは、その出発点で、記号の伝達性そのものをcommunicationと同一視したが、それゆえ捨象された膨大な領域が、今日、次世代以降の情報学の展開／転回には不可欠となっている。これは筆者が現在進めている共同研究会「蜘蛛の巣上の無明」の根幹に関わるので、ここに詳述の余裕はないが、先に『映しと遷し』（花鳥社、2019）題する論集で、萌芽的に扱った「不可視領域」に帰着する。これまた、本来ならば総合研究大学院大学の総力をあげて取り組むべき課題と認識しているが、その関係の科学研究費補助金申請は四度にわたり非採択となっており、今期で引退する筆者としては、本件は後世に託す他ない、将来の課題となる。

3. 「<異>をつなぎ、未来へ」

以上を受けて、総括の総括としたい。本フォーラムの副題には「<異>をつなぎ、未来へ」とあった。遺産を未来に継ぐことが、archivesの使命だろう。「継ぐ」tsuguは日本語では「繋ぐ」tsunaguや「償う」tsugunauときわめて近傍にある語彙群となる。ところで「遺産」は英語ではheritageあるいはlegacy、これに対して「償う」はcompensateで、欧米語では両者には語源的に相互関係は見いだせない。日本語の場合、「つぐ」ことには「つぐない」の意味が含まれているが、「償う」とはなんらかの損失・喪失を前提としている。「継ぐ」には取捨選択が回避できず、そこにresilienceが働く。言い換えれば「継ぐ」こと、すなわち次世代へと「繋ぐ」ことには、その裏に犠牲を伴うほかない、との意識が言語的にも確認できる。ここに「死者」と「生者」とをいかに「繋ぐ」かの問題が、姿を現す。

川村清志先生の発表では、気仙沼に残る、片手片足の石碑の事例が報告された。欠損には、言語的な秩序（「象徴界」）にも回収できなければ、非現実による代償幻想（「想像界」）にも転嫁できない、表象不可能な現実（「現実界」）が託されている、とのラカン派的解釈が演者からは示された。それへの補助線となるが、この欠損像には、後世が過去を「継ぐ」際にその前提として心得ねばならない「喪失」が刻み込まれている、とは言えまいか。そして、近親者の死に際会すると、その喪失を「償う」べくそこにはおのずと歌が生まれ、踊りが出現する。それが「まつり」のひとつの発生論的原初形態でもあったはずだ。

シンポジウムでも話題となった玄侑宗久には、出世作『中陰の花』がある。近親者の供養を話題とする短編小説だが、その文庫版への解説で、河合隼雄は死者つまり「ほとけ」は、個としての人格が「ほどける」ことで成仏し「ほとけ」になるのだ、と説いている。固有名を帯びた主体は死を契機として、無名の存在へと「ほどけ」てゆき、この解体とともに、先祖の一員

へと変貌する。これもシンポジウムで話題となった岩手や宮城の「鹿踊り」は宮澤賢治も「鹿踊りのはじめ」で取り上げた話題だが、ここで賢治は、人間の世界と鹿たちの世界とが「つながる」一瞬を捉えている。さらにその鹿踊りは先祖供養でもあり、死者が生者の世界から「ほどける」ための儀礼でもある。「つなぎ」「ほどける」服喪には<異>世界との遭遇は不可欠の契機であった。おりから没後半世紀を迎えた小説家の三島由紀夫は、創造が経糸だとすれば、礼儀礼節は横糸であり、両者が交差するところに霊性が宿ると語っていた。よく考えれば危険な思想にも直結する想念だが、我々の文脈では「創造」にあたるところに、世代間を「つなぐ」「つぐない」のありかを重ねることもできよう。

*

はじめてのオン・ライン開催となった今回の「文化フォーラム」が、それにふさわしい事業報告書・論文集を残し、それが、総合研究大学院大学の異なる分野を「つなぎ」、今の災厄を通して、将来の世代へと経験を「つなぐ」機会として生かされることを祈念し、関係者皆様への謝意を込めつつ、フォーラム事業担当専攻の専攻長としての総括に替えたい。

令和2年度学生企画委員会

委員長 国際日本研究専攻 石原 知明
副委員長 日本歴史研究専攻 前山 和喜 (報告集編集委員長)
委員 日本文学研究専攻 伊藤 美幸
(50音順) 地域文化学専攻 岩下 夏岐
国際日本研究専攻 王 紫沁
地域文化学専攻 金丸 雄一
国際日本研究専攻 宋 丹丹
比較文化学専攻 服部 裕規

後援 「国際日本研究」コンソーシアム

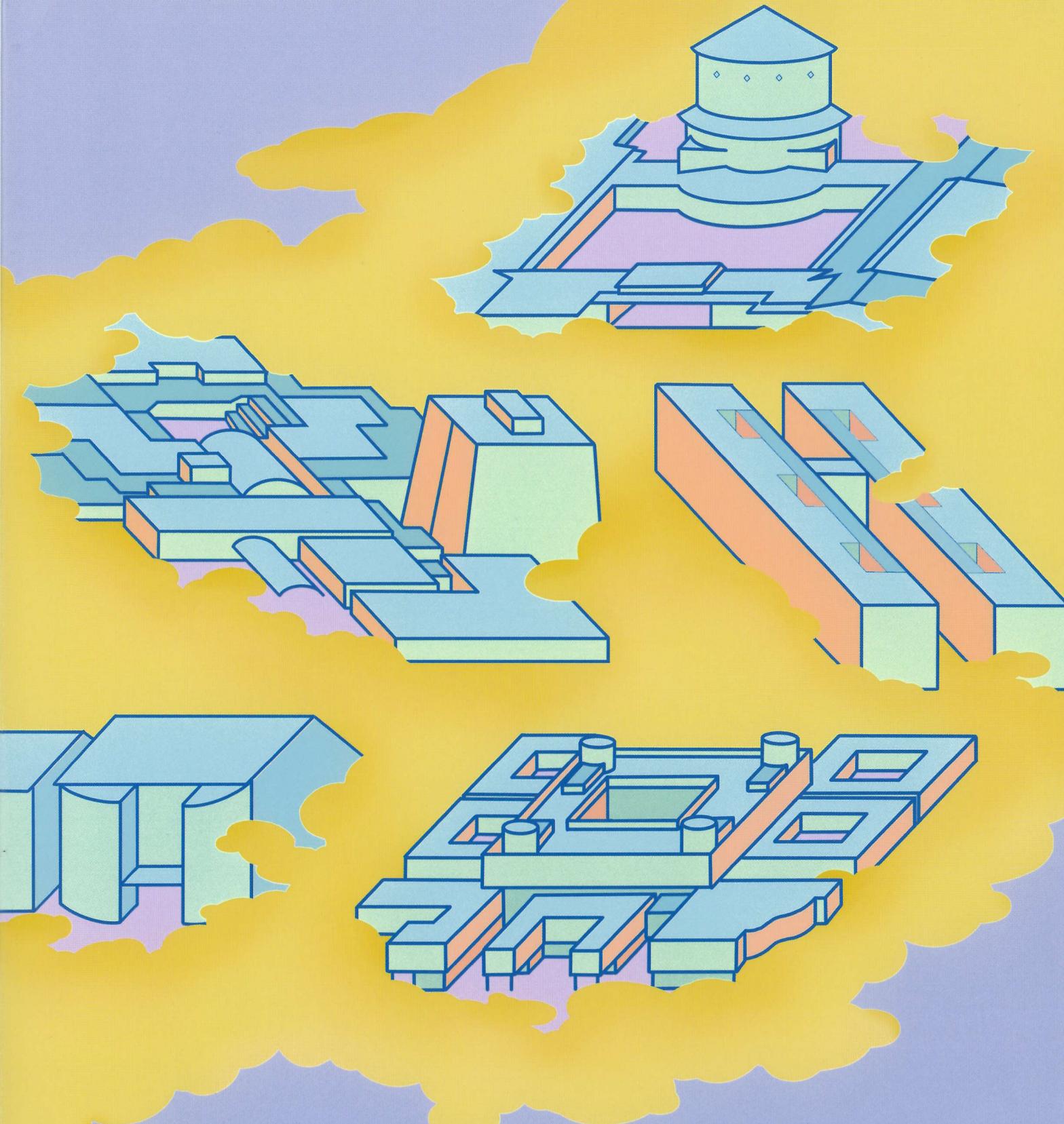
フォーラム担当教員

文化科学研究科長 池谷 和信 教授
国際日本研究専攻長 稲賀 繁美 教授

総研大文化フォーラム2020報告集

文化のレジリエンスとは? : <異>をつなぎ、未来へ

発行日 令和3年3月31日
編集 総合研究大学院大学 文化科学研究科
総研大文化フォーラム2020学生企画委員会
デザイン 王 紫沁
発行者 国立大学法人 総合研究大学院大学 文化科学研究科
事務局 総合研究大学院大学 学務課学務支援係
〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町 (湘南国際村)
電話 046-858-1583 FAX 046-858-1632
印刷 株式会社 正文社



総研大文化フォーラム2020報告集

文化のレジリエンスとは？：〈異〉をつなぎ、未来へ

於 国際日本文化研究センター
2020年12月5日～6日